

武家名目抄

職名部廿七下

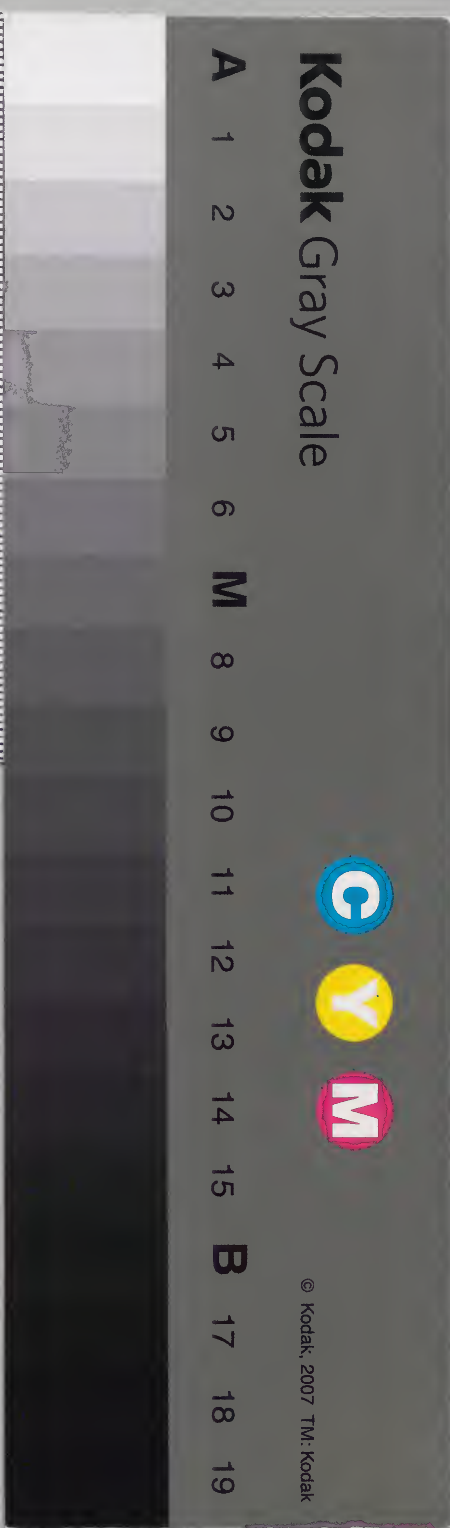
第四十八冊

瘦

庫	文	門	内
五三函	三〇九一	和	書
西一五架	六〇冊	類	

共六十

内閣文庫	
番號	和 36091
冊數	60 (48)
函號	153 276



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

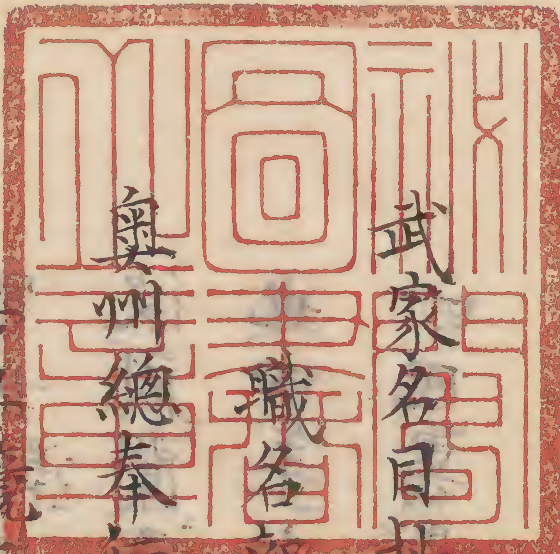
奥州總奉行

奥州探題 又稱奥州管領

羽州探題

陸奥出羽管領

蝦夷管領 又稱蝦夷代官



武家名目

抄第四十八冊

職各部廿七下

奥州總奉行

吾妻鏡云文治五年九月廿二日己卯陸奥



國御家人事葛西三郎清重可奉行參仕之

輩者屬清重可啓子細之旨被仰下云々廿

四日辛巳平泉郡内檢非違使所事可管領

之旨葛西三郎清重賜御下文於郡内諸人

停止盪行可糾斷罪科之由云云凡清重今
度勲功殊拔群之間匪奉此等重職刺伊澤
磐井牡鹿等郡已下并領數箇所云云
又云建久元年三月十五日己巳左近將監
家景號伊澤可為陸奧國留守職之由被定位
彼國聞民庶之愁訴可申達之旨所被仰付
也四年七月廿四日戊子橫山權守時廣引
一匹異馬參營中將軍覽之有其足九前足
五後

四是出來于所領談路國國分寺邊之由去
五月之比依有告作怪召寄之旨言上仰左
近將監家景可被放遣陸奧國外濱云云五
年六月廿五日甲寅獄囚數輩自京都被召
下其身可流遣奧州之由被仰左近將監家
景眼代之是強盜之類云云六年九月廿九
日庚戌故秀衡入道後家于今存生殊可加
憐愍之由被仰付葛西兵衛尉清重伊澤左

近將監等云々兩人者依為奧州摠奉行也
又云建長二年十一月廿八日己丑放遊浮
漚之士寄事於雙六好四一半博奕為事就
中陸奧常陸下總此三箇國之間殊此態盛
也隨有風聞之說今日有驚御沙汰於自今
以後者圍碁之外至博奕者一向可停止之
由所仰出也陸奧國留守所兵衛尉常陸國
兵戶壹岐前司下總國千葉介等可加制禁

之由各含仰旨云々

按當時不云陸尉ハ仰旨云々
氏ハ只々水原の裔なり

又云康元元年六月二日辛酉奧大道夜討
強盜蜂起成往及旅人之煩仍可致警固之
者今日被仰付于彼路次地頭等所謂壹岐
六郎左衛門尉同七郎左衛門尉出羽四郎
左衛門尉陸奧留守兵衛尉宮城右衛門尉
和賀三郎兵衛尉同五郎左衛門尉自餘十
七人姓
名略已上廿四人御教書云奧大道夜討強

盜事近年為蜂起之由有其聞是偏地頭沙
汰人等無沙汰之所致也早所領內宿
置直人可警固只有如然之輩者不嫌自他
領不可見隱之由被召住人等起請文可被
致其沙汰若尚背御下知之旨令緩急者殊
可有御沙汰之狀依仰執達如件建長八年
六月二日
抄書云即左衛門尉同左衛門尉等
何處も為西清室の侍る陸奥の人なり
新篇式目追加云一近日出羽陸奥國夜討

強盜蜂起之間往還之輩有其煩之由風聞
尤不便是偏郡鄉地頭等背先御下知無沙
汰之所致也甚無其謂早柴田郡内知行宿
宿宿直屋令結番殊可令警固也且籠置惡
黨之所不可見聞隱之旨可被召沙汰人
等起請文者依仰執達如件正嘉二年八月
廿日武藏守判相模守判
抄書云此條等強盜
が軍衆の事なり
花營三代記云應安五年二月十八日奥州

奉行事被仰松田左衛門尉訖

抄は一條ハ号利
將軍の時の事

少く京京(一)在(一)の(一)司(一)判(一)の(一)と(一)成(一)計(一)治(一)す(一)に(一)死(一)者(一)に(一)命(一)を(一)
与(一)ふ(一)に(一)あ(一)り(一)武(一)治(一)の(一)事(一)を(一)と(一)し(一)て(一)治(一)る(一)る(一)の(一)事(一)
あり(一)これ(一)は(一)徳(一)倉(一)殿(一)の(一)時(一)に(一)在(一)り(一)て(一)西(一)伊(一)保(一)の(一)事(一)に(一)あ(一)り(一)
不(一)同(一)一(一)り(一)これ(一)も(一)名(一)稱(一)用(一)一(一)に(一)あ(一)り(一)て(一)多(一)く(一)載(一)
所(一)に(一)徳(一)倉(一)の(一)事(一)に(一)あ(一)り(一)て(一)陸(一)奥(一)出(一)羽(一)の(一)事(一)と(一)徳(一)倉(一)の(一)方(一)の(一)指(一)
揮(一)を(一)と(一)し(一)て(一)治(一)る(一)る(一)の(一)事(一)に(一)あ(一)り(一)て(一)此(一)の(一)事(一)を(一)
一(一)たり(一)

抄奥州を東極迄商乃地なり徳化早以難

事ありて京政勢此なりと法を將軍と事ありて

故に諸政以て治るに徳倉右大臣の命を

とて事一に治る事とありぬと文治中に

為京京衛を誅して奥州を平定ありて

一後之代に別々有功の法を治る事とあり

警彼とありて中ふ着る法を治る事とあり

心膽沃設る并牡麻に別々の法を治る事とあり

奥州に治る事とありてありてありてありてあり

法を治る事とありてありてありてありてあり

西の職ありてありてありてありてありてあり

尚古舊職を尊ぶ人々一清重と其子内
大少事職を承りきりてに安んずる事
あり中野の事元由智乃下司山
一此の勢をすくはるるを愛する
又武家乃命令を施り一威風凛々
越えり此の事世々職を承る事
之事とて人を承る事高平の事
左馬尉氏平重丹を復する由是西に此人は
隠倉右大夫家の次又ありて是れ是れ

吾妻鏡本の諸宗頼の事ありては
疑わぬにありては信ずる事あり
天下と云はれしは一族石井我房を
州乃探題に定めて是れなり
此の事ありては信ずる事あり
子孫由智乃を承る事あり
信成合を考ふ事あり

奥州探題又稱奥州管領

佐竹文書云陸奥必雅樂在地位職事

尚古舊職を嘗て人々へ譲るゝ其の内の
大小事職を承りきりてにありきりて

此の職を承りて

又武家乃命令を施りて一職を以てし

又武家乃命令を施りて一職を以てし

又武家乃命令を施りて一職を以てし

又武家乃命令を施りて一職を以てし

又武家乃命令を施りて一職を以てし

又武家乃命令を施りて一職を以てし

其の職を承りて其の職を承りて其の職を承りて

其の職を承りて其の職を承りて其の職を承りて

其の職を承りて其の職を承りて其の職を承りて

其の職を承りて其の職を承りて其の職を承りて

其の職を承りて其の職を承りて其の職を承りて

奥州探題又稱奥州管領

佐竹文書云陸奥必雅樂在地位職に事任

此中文了被抄法付佐竹上徳入道道源代

自寘之状依御執連如件建武四年三月廿六

日少捕江郎成武彦与 抄少捕江郎ハ石堂義房等
此時陸奥乃陸將也

有少中此事成爲記録
有武彦等ハ高師直也

阿蘇官文書云抑此境事自去年六月凶徒

前來連了合戦也雖早不被決雖旌奥州勢

進發不爲近候乃依被相約彼到來及數

月候於此方城者云要害云云粮等用意

縱雖送年月不可有子細候然而凶徒者多

勢也此方者各城者以之爲被中後奥州勢

被押先途候於奥州者大畧帰伏候凶徒方

大石堂入道楯被打落以了於今者不可

有吳儀作云云五月廿六日阿曾大官司及

刑部大輔秀仲 抄此状爲康永元年の書ナリ
石堂入道及義房の事あり

白河文書云結城大元少捕同彈正少弼武

部少輔伊達一族等事各所方了被軍患之

由先日被成沙教書院了存全旨及狀如件

應永二年四月十九日宮内少輔四郎入道

殿御判多氏○按後城伊達とくに奥州の初主なり

尊卑分脈云畠山高國上野介觀應二三十

二於奥州為貞家被討高國男國氏中務大

輔左馬權頭奥州管領与父同時被討國氏

男國詮修理大夫奥州探題國詮男滿泰修

理大夫奥州探題

又云吉良貞家修理大夫奥州一方管領貞

家男滿家中務大輔奥州一方管領按一方管領と云ふ

畠山國詮と云ふと云々と云ふと云々と云ふ

白河文書云奥州郡を檢断奉新事任先例

不才有相遠但於安積郡去遠亦有去沙汰

之状如件貞和二年六月廿七日結城大藏

大輔殿右馬權頭花押按右馬權頭は畠山氏あり
分録し左馬權頭と云ふ

得方

又云陸奥國白河庄岩瀬郡小野保換弓事
京形御左右之程弓先例可被奉新之狀如
件貞和二年七月十六日結城大藏大浦
右京大夫花押梅右京大夫身
吉貞貞家力
陸奥國會津示現寺文書云之浦大炊小太
郎左衛門尉盛通書平氏中陸奥國耶麻郡
内中利根川村尚知行分安堵事申狀通
謹進覽之細裁于狀候以代官令云上候

可被後河沙汰候裁以此旨可有被披露以
傳云貞和元年八月十二日進上武藏守殿
右馬權頭國氏在判左京大夫貞家在判
陸奥國中河邊八幡文書云石川板橋掃部
介高光中不願陸奥石川庄之内子石板橋
八幡宮神願中河邊村澤尻等之事太被彼
所去高光重代相傳之不念光平在伏和權
当时光為官方之時令押領畢而時光陪系

之後畝山右馬權頭管領時維及爭備高
光被裁許當知行云々爰時光不令因意顯
信卿尚時山後隨一也於高光者自竊初為
柳蘇去々年月々被軍功至今抽戰功出者
當不等本願尚知行互相遠可致安堵以下
文之旨中々急速被徑涉此以裁高光軍
忠為偽中々々八幡大菩薩御符有子蒙以
以此旨可有此披露以必收得云觀應云々

卯月十三日進上遠江守殿右京大夫貞家
判事云々云々
又云陸奥國石川庄下河邊八幡宮者伊豫
大吉八幡殿御時被奉崇敬社檀也然者今
度凶徒對治事令祈請之處依為奉座當國
會津河沼郡内佐野村令奉寫云候就了可
彰公方御寄進狀之旨神主石川掃部助高
光中々候急速可有中々沙汰候以此旨可

有河披露以心之詳云觀應三年七月八日
進士仁木玄經大補殿右京大夫貞家判
白河文書云陸奧國舍津嶋川在米谷事公
方恩賞于沙汰之程亦充行也与先例云被
致沙汰之状如件文和三年十一月九日結
城之河与殿中勢大補花押 按中勢大補也
古名海家也
尊卑分脈云斯波家兼 本時 伊豫守左京大
夫奥州管領延文元六十三卒四十九歲

上杉系圖云刑部大輔憲春弟憲英藏人大
夫陸奥守奥州管領法名常興太宗孫國濟
寺 伊豫守
武衛系圖云家兼伊豫守左京大夫出羽陸
奥大將号斯波 上杉家
大崎系圖云斯波家兼左京大夫伊豫守依
勅命与舍兄高經下向於北國而退治於義
貞故賜出羽陸奥探題下向時光明院御綸

昔并金淵太刀從高氏賜之而退治石塔殿
安定羽奧國祖先領總州大崎故於當國曰
大崎也家兼界直持左京大夫刑部大輔
男兼賴羽州最上祖延文三年八月三日下
向最上山形
奥州那須谷大安寺文書云大寺安藝入道
道悅竹貫冬河口郎光貞相端右州郡吉村
此事道悅亦中頭有傳謂云

被願堂狀如件明德五年七月六日在東京大

夫判

按在東京大寺
別波更持也

此狀應大寺山莊

上杉系圖云憲英男憲光廳鼻和左馬助奧
州管領法名光山道盛雲龍軒

白河文書云因之取以名取北方內本知新地
事今夜於多方被被忠節以者不可有子細
傳一向憑存也十一月十二日釋上結城
冬河弓殿在東京大夫直持花押

大崎系圖云直持男詮持左京大夫詮持男
滿詮左京大夫於田村大越討死滿詮男滿
持左衛門督父滿詮討死時得伊達氏恩故
付屬名取郡於伊達滿持男持詮左京大夫
持詮男教兼左衛門佐為上使太田殿下向
次依媒妁使息女嫁伊達氏
蜷川親元祀云勇州探頭右衛門佐殿入侍
不氏家之河守同州新波佐治大浦殿

新波

御願瀧浦山羽州探頭右京大夫殿氏
家傳与与以上之今不事太田上野介
中分如此抄在要佐是太崎教兼あり治部大浦はそ
同族はそあり一系をそ高倉寺城り
石川文書云探頭与安河内守近日及号矣
云々右不不拉能不日不被廻至為計略從
雖有意教莫東進度之百者惣別開諸事早
速令出陣不被改忠告之由不被作下也仍

執達如件寬正六年五月十九日

大浦徹尾張守

大崎系圖云教兼男政兼陸奥守政兼男義

兼左京大夫依屋裏亂走伊達伊達氏金澤

氏加勢三百餘騎而被送大崎故嗣家上洛

而從公方義尚義之一字并包平之御太刀

并領焉

卷川親俊記云天文七年六月十五日

奥州探頭大保後

大窪雅樂允

大崎系圖云義兼男高兼彦三郎立一年而

早世依無嗣子請於伊達左京大夫種宗末

子小僧九而為聳冠而號義宣住岩手澤城

翌年八月三日大風起屋室廢壞此時息女

不幸壓死其後義宣出奔葛西於桃生辻堂

病死

伊達文書云就奥州探題職之儀為孔大督

一和馬一匹舊為金之十兩到來自出於於

晴光可中下為之指下奉阿北也九月廿九

日伊達在京大夫との義輝按在京大夫種
宗ありて是を

子小僧九太保を
つきし時のさる

大崎系圖云高兼男義直左京大夫上洛時

公方發向越前國御對面無之故翌年大崎

惣先達山伏狐澤上野下向之次自公方御

書并鎧并領義直男義隆左衛門督秀吉公

發向于關東而北條家族御退治之時遠國

遲參之諸家皆被令去其城天正十八年八

月十九日退賀美郡中新田城移同郡小野

田城同月二十四日經最上路而上洛萬千

本其後依秀吉公命被屬長尾景勝於奥州

會津卒

按是利敵之極と云々是し初之奥羽を僻遠

此地より榎部及び新元村にありて
會島取官軍の首領として豊羽乃二州と統
率領す。あるに二五武士海軍指揮官後島田
曰くはそまて我歴をうらむべきを免す。若し院殿一
族石堂義房を陸奥の諸將として可成り流
し。小用の大仕事をして治さし。是具是具羽乃の物
共。少成招誘してゆたせし。め具是具軍を去と信留
言し。官軍を討つ。む。是。は。羽。乃。の。實。也。探。頭。の

始。免。あり。そ。後。義。房。の。職。を。掌。り。め。る。島。田。武。氏。と
吉。良。貞。家。二。人。に。命。じ。陸。奥。探。頭。と。せ。り。
ま。し。ら。島。田。武。氏。を。在。り。し。る。島。田。武。氏。に。殺。さ。れ。
り。其。を。信。ん。自。ら。れ。知。り。島。田。武。氏。代。執。行。せ。り。
貞。家。の。職。を。子。島。田。武。氏。に。傳。へ。り。後。又。島。田。武
氏。の。男。島。田。武。氏。と。探。頭。と。補。せ。り。是。満。家。と。せ。り。
島。田。武。氏。は。後。を。し。む。我。ら。を。い。く。り。と。あ。く。斯。部。家
と。豊。羽。乃。二。州。の。探。頭。と。任。せ。り。是。々。中。向。し。き。

二玉れ成候と目とり定むるを切巻く二将乃
 上ふ出ありきと角ふ家ハ由縁の子海系の時
 片一方の探題とてを治たり古は家ハ後
 家とていしと職とさり上杉家も又管領等
 一とてつてわともなへりて其所の地はとて
 斯波一家の後領とてなりとあり
討田系品にて
古は海系を治
 氏子傳の後に改名をてとも同系品なり
 此氏の子は經
 大浦は家とていしと縁念基氏の時
此氏の子は經
大浦は家とていしと縁念基氏の時
 の内ありて其地を
 家系の子は經の時ふとて其地を治
 たりとあり

六探題ノ定免をの意ひとなり奥州の成敗を掃討
 して是より二人の子孫永く治むる所成候とて
 有候と他門は族世任ふありとらざる事とありぬ
 六探題とて是利ありありとて其地を治
 九州探題といひて其地は向ふあり大隈義隆
 職を失ひて後いふとて其地を治とて事なり

出作はとていしとありとて其地を治とて事なり

羽州探題

最上系圖云斯波家兼二男兼頼修理大夫
出羽大將延文元丙申年八月六日出羽國
最上郡府中山形入部康曆元年六月八日
卒兼頼男直家右京大夫應永十七年正月
六日卒直家男滿直修理大夫應永廿年八
月三日卒滿直男滿家修理大夫嘉吉三年
五月廿八日死滿家男義春右京大夫文明
六年二月廿七日死義春男義秋修理大夫

文明十二年十二月廿六日卒義秋男滿氏
治部大輔明應三年七月十四日卒滿氏男
義淳左衛門佐永正元年九月九日卒義淳
男義定修理大夫永正十七年二月二日卒
義定男義守天正十八年五月十七日死義
守男義光出羽守天正十九年任侍從慶長
十六年三月廿三日任少將同十九年正月

十八日死
按出羽大將と一書不出羽
按察使とすは誤なり

卷川親元記云奥州探題左衛門佐後、

不氏家三河守羽州探題右衛門大夫及氏家

侯与与以上右田上野介光任中、此京大

支那義長あり氏家 侯与与以上右田上野介光任中、此京大

奥羽永慶軍記云白鳥十郎羽陽谷地、

白鳥長久力嫡子十郎義國ト云之者、

山形ヲ滅之最上三郡ヲ手入

國中、大将ニナラシヤト明暮心、

ケルカ兔角信長將軍ニ見立媚、

後一揆ヲ起サシト擬テ、

乱タル世ナレハ左右ナク通ルハ、

難ケル先白鳥隼人ト使者ト、

安土ノ御所ニ遣ハシテ、

光ノ臣氏江尾張守ト力、

申ケルト、白鳥十郎ト、

ヲナスト承ル今ノ世ノ習ヒ、

リ企テ君ヲ討奉ニト議スル事モ有ヘシ
是ヨリモ使者ヲ以仰ラレ然テ身候ト申
ケレハ義光ノ弟ト志村九郎兵衛ヲ
使者ト命テ信長公ハ遣ニ付丹九郎兵衛
國ノ乱通路心ニ任セ子ト越後國ヨリ此
國ヲ經テヤウニトシテ到着ス山本彦
三郎ヲ以テ白鷹一居献ニ其序ニ申テル
ハ義光今度某ヲ差上セ候更別義トテ

又是ハ^ハ未^ニ申^テ又事^ニ候^ハ
義光先祖按察使足利修理大夫兼頼ヨ
リ今義光迄八代出羽ノ國ノ大将ニテ候
日外白鳥十郎使者ヲ以テ已羽州ノ大将
外ルニ^ハ訴ヘ奉ルト承ル是極メタル偽
命テ候此旨ヨク申セト某ハ^ハル
ハ此差上セテ候ト申ケレハ信長公キコ
シメシテ扱ハ白鳥十郎偽リケル事ソ心

得子ソハ義ヲラハ義光出羽ヲ大将タル
夏疑ヒナレトテ割其時四位少将ニソ
補セラレケル九郎兵衛ニモ御對面有テ
御暇給リケレハ急キ本國ニ歸ケリ義光
大ニ喜ビサアラハ軍兵ヲモ民ホシ谷地
川城ニ取カケテ討テトソ宜ヒケル
抄義光少将トモハ長子ニハ此州取テ夫ニ歸
年アリ本書の説得ニテリ
又云 山北前田北奥州北羽州ノ邊ハ新國
氏断絶條

中ノ事サハ音信不通ノ時ナレハ何事モ
偽ノ事多カリシカ最上會津ナト使者ヲ
上セテ國中ノ探題職ヲ蒙リシナトトミ
ラヌ虚説唱ヘケレハ油断スヘキニアラ
ス云々

抄羽州探題多斯波家兼奥羽二州の探題と
ありしに権奥多斯波家兼を以て二人とて二州を
兼りし事ありしなり抄を以て兼りし直

新編倉大草紙云應永五年十一月廿日氏後
曰十二歳より出遊去かりし其君後急公従は
下左之流督補任に之儀倉より傳り給ふ
永六年春より陸奥出羽両国の司とありて
福倉殿の中満員満直二人中向稻村篠川両氏
以在因九年奥州遠方此所靈淨道大昭大改宗
法名圓教隠謀を企て深川殿の下知り志す

此中の中一味同心乃族據紀しを同五月
廿一日上杉右衛門佐入道福秀が矢野殿向此所
道よりより赤飯と云ふ所不城銭の事今致して
隠倉殿をよ道し悉討取きを就とをを其の
大務まゝ馳向ひ九月より伊達打負降参り
又云福秀の病年のより控帳しと引新謀を
起し新編倉殿の中書より福秀副状より廻文
を法向より京参り此作より持氏公年憲基

嫡少子傳以實也

喜連川系圖云滿兼弟滿直稻村殿持氏同
時自害滿直弟滿貞篠川殿於報國寺與義
久同自害

喜連川判鑑云持氏永享十年六月十六日
憲實御退治トシテ鎌倉ヲ御立武州高安
寺ニ御陣三浦介時高鎌倉ノ御留守タリ
因茲憲實京都ニ訴フ京都ヨリ鎌倉退治

トシテ上杉中務少輔持房大將トシテ綸
旨ニ御教書ヲ添テ諸勢ヲ差下サレ九月
廿八日早川尻ニテ合戰持氏ヲ背ク者多
クシテ敗北御陣ヲ相州海老名ノ道場ニ
移シ玉フ十月二日鎌倉ノ警固三浦時高
心替シテ三浦ニ退去同月十七日鎌倉兵
火十一月朔日三浦時高ニ階堂ハ一族上
杉持朝大藏谷ニ乱入ス近習輩出合テ合

戦其間ニ義久稻村満貞殺國寺出入テ御
自害同月五日海老名ニ義久御生害流由
聞エ持氏急テ鎌倉ニ歸リ入水屋熊張堀
芳傳カ陣中ニ憲實ト和睦ヲ議シ御林寺
ル芳傳謀ニ領掌ニ奉テ詮澤ノ稱詔侍ハ
供奉同平一日永安寺ニ移リ奉リ御剃髮
ナリ十二年三月十日於永安寺御自害近
臣數十人自害合テ御林寺大林寺ニ遷シ

抄是村殿乃時翼羽の成敗斯波家家の世藏
沙汰多ク心あまは別々ニ管領を置キテ
多紀ト似テウトトモト明徳中鹿苑院殿の
空名にテ翼羽の二心をも関東八州ト知ル
一々徳念公方取リテ管領ありて
余きく是レ一ウを意ル六年上杉謙助のけ
取ル一々當時の公方満貞朝臣ト満直
満貞を翼羽ト管領トナシテ稻村篠川の女

あは居りし二名の政務をとりしめたり
斯波氏も世より二冊の統領ありし人をも
世職とありては急用はあはしき人をも
つりし世職より居りし世のあはしき人をも
その人きき事なとありしを隠念より別ふ
あはあつをとりし西勢をとりし世の
つりしありし世のあはしき人をも
四十年けりし世の隠念の持氏朝長京師と

不仕の事ありし世の隠念の持氏朝長京師と
同く自殺しし世の隠念の持氏朝長京師と
隠念公方の連枝とありし世の隠念の持氏朝長京師と
あはしき人をも

蝦夷管領 又稱蝦夷代官

後訪大明神傳何云元亨四年乃以より嘉應年
中にふりし世の隠念の持氏朝長京師と
あはしき人をも

尚く大海の中央にありし中根本と首長も亦
一と武家と濫取を法護せんを以て安
右と云ふを擧責後順と云ふを子孫と云ふ
季久又を即季長と云ふは後父兄也嫡度相
論の事何れと云ふ合戦数年よ及る其人を其
多め程非伐裁決と云ふ彼亦又も其平敷子
夷絨を僅集るる境内未郡も境折る國城郷と
構るお年々其の城傍祖より其の浩河を隔て

雌雄互ふ決し一川一國茲武將大軍を以て征
伐と云ふ之とも凶流亦盡に其討まは其の
敵久紀清也黨此輩多し命を墮漸亦其の
及如ぬ負任也討の首れ亦と云ふ年序を以て
其人多怖畏を以て其れを以て季長と後人忽り
城郷伐破布し其甲を以て其の征を以て
官軍の陣は階級之軍方其を稱し其別其
東に布り其

地藏靈驗記云往日鎌倉ニ安藤五郎トテ
武藝ニ名ヲ得タル人アリケリ公命トテ
リテ夷島ニ發向レ容易夷敵ヲ亡其貢ヲ
ソナヘサセケレハ日本ノ將軍トシ申ケ
ルホレハ夷トモ年毎ニ貢ヲソ奉リヌ
保曆間記云元亨二年ノ春奥州ニ安藤五
郎三郎同又太郎ト云者アリ彼等カ先祖
安藤五郎ト云者東夷ノ堅メニ義時カ代

官トシテ津輕ニ置タリケルカ末也此西
人相論スルモ莫アリ高資數ニ賄賂ヲ両方
ヨリ取リテ兩方ヘ下知ヲナス彼等カ方
人ノ夷等合戦ヲス是ニ依テ關東ヨリ打
手ヲ度ト下ス多クノ軍勢亡ヒケレトモ年
ヲ重テ莫行ス

按高資ハ小條家の内
復願長勝左馬尉あり

異本伯耆卷云奥州津輕ノ佐人安東又太
郎季長同郎從季兼ト同又三郎ト云者所

領ノ事ヲ論スル子細アリ兩方訴ハ古所
ニ高資賄賂ニシテ此理アリ非来ニテ
惡事マシ下知此レハ兩方下知ヲ背及
合戦ニトアリ此安東平芸ハ義時力代平
夷島ノ押下レテ安藤力ハ男阿津輕ニ置
ケル彼等カ末葉也下知此レハ兩方下知
北條記云元亨三年出羽蝦夷蜂起度以及
合戦自去元應二年蜂起云々正東三年六

月六日依蝦夷蜂起事被改安藤又太郎以
五郎三郎補代官職訖嘉曆元年三月十九
日工藤右衛門尉祐貞為蝦夷征討使進發
七月廿六日祐貞虜季長歸參二年六月宇
都宮五郎高貞小田尾張權守高知為蝦夷
追討使下向三年十月奥州合戦事以和談
之儀高貞高知等歸參

梅鑑倉右方羽家ノ事ハ武家成興ノ事也

やとい結ぶ耐お軍及秋田城弁をそのの類
羽乃色界と有りて蝦夷法極の職多りし
右大将の職をとりて後身結ぶ耐此
官職成廢をとりて夷狄の叛乱は海内
はかりきりなりけりなり小條義村武家の概
格ありし時しあな氏とば輕の夷地し居
らしめりし羽羽及波島此蝦夷に備へ夷人
日復願きし是しより子孫お傳へて蝦夷法

明治十

結ぶ耐の代ありしを結ぶなり御に小條高時概
格此時よりして羽羽の蝦夷叛乱の事あり
しに結ぶ耐あな季長とて戦制しる事能はる
よなりし高時の職をとりて季長とて一門を
以ては輕の男後と有りしを正ししなり
はらり果ししあな氏の闘争に及りし
結ぶ耐征討使をきりし一をひい平定せり
ぬくおよりなりしとてわとなく小條乃門

同平三日十日

八等家言各言計理效

山西縣本

同平十五年二月六日

謝

